地域の底力

青森県弘前市の人を育むまちづくり

市政、観光、そして健康。
弘前城と岩木山が見守り、
四百年の歴史を紡ぐ弘前市では、
市民一人一人の意識の進化が、
まちの活性化を生んでいた。

弘前市のまちの要であり、東北地方では唯一現存する弘前城天守が受け継がれてきた弘前公園本丸広場。現在、天守の背景を岩木山が彩るが、これは石垣修理のための曳屋により生まれた、約10年間の工事期間中限定の貴重な眺め。

取材・文 山内史子　写真 野瀬勝一

市民と行政が手を組む オール弘前の取り組み

青森県西南部、「津軽富士」とも呼ばれる岩木山の東に位置する弘前市の歴史は、一六〇三年、弘前藩初代藩主津軽為信（ためのぶ）がこの地を拠点として、城の建築に着手したことに始まる。約一八万人と県下の第三位の人口を抱える今もなお、弘前城はまちの要だ。

暮らしを支える産業の柱は、全国シェアの二割を占めるリンゴ栽培と、例年、約二〇〇万人の人出を誇るさくらまつりを主軸とした観光だ。その観光を含め、近年、市民の意識が徐々に変わったことで、まちが活性化しているという。現状と背景をたどるべく、弘前市長の葛西憲之（かさいのりゆき）氏にお話を伺った。

2015年に行われた天守曳屋のイベント。総重量約400トンの天守を3カ月ほどかけて移動させる作業に一般から参加者を募ったことで、約25億円の広告効果が生まれた。（写真提供：弘前市）

二〇一〇年の市長就任時に葛西氏が目指したのは、「オール弘前。市民と行政が一緒になり、同じ目標に向かっていくまちづくり」。そのためにまず手がけたのは、車座ミーティングや青空座談会という、市民の声を直接聴くことができる話し合いの場の開催だ。

「時間はかかりますが、市民全員がまちづくりのプレーヤーとして参画してくれることが大事。その過程を踏まなければ、オール弘前体制の機運の醸成はできないと考えました。七年が過ぎ、市の施策を理解しながら語る人が増えてきたのを実感しています」

弘前城外堀を桜の花びらが埋め尽くす花筏。（写真提供：弘前市）

意見を聞くだけではなく、提案を形にする受け皿もつくられた。そのひとつが、「弘前市市民参加型まちづくり一％システム」。個人市民税の一％相当額を財源とし、市民が独自の活動を行える仕組みだ。市民の応募を審査するのも、また市民。ここから、数多くのまちづくり・地域づくりにつながる活動が生まれているという。

「市民の思いを受け止めることで、信頼関係が構築される」と話す弘前市長の葛西憲之氏。マニフェスト実践のためのアクションプラン作成や機構改革が評価され、就任翌年の2011年、第6回マニフェスト大賞首長部門最優秀賞を受賞。

市役所内にはほかの自治体ではあまり類を見ない分析機関として、「ひろさき未来戦略研究センター（ＨＩＦ）」を設立。多様な分析と政策提案がなされている。

「結果として、役所の考える力が高められた。これがＨＩＦの一番の功績だと思っています」

葛西氏は、歴史ある建物に新たな価値を見いだし、ファシリティーマネジメント（設備の管理・運用）の視点で活用を推進することにも力を注いだ。最近注目を浴びたのは、二〇一五年に行われた

弘前感交劇場により、市役所、弘前観光コンベンション協会、商工会議所などの間に本音で話し合える横のつながりが生まれた、と話す弘前市観光振興部長の櫻田宏氏。

弘前城天守の曳屋（ひきや）だ。崩壊の恐れがある石垣の修復のため観光客の減少が危惧されていたが、イベント化により約四〇〇〇人が曳屋に参加。広くメディアに取り上げられることとなった。

散った桜の花びらが弘前公園の外堀を埋める花筏（はないかだ）も、また然り。ポンプで水を入れて流れをコントロールするという市役所職員の発案が実り、美しさが格段に増した。インターネットを介し、今や世界的に注目を浴びる存在だ。

人口減少の課題に対しては、保育料の軽減をはじめ子育て世帯の負担軽減のための対策が手厚くなされている。U・J・Iターンの移住対策としては独自の展開をはかるべく、県とはまた別に東京に移住サポートセンターを開設した。

「移住者の増加は人口減少対策にとどまりません。移住者によって刺激され、弘前の人たちがまちのよさを認識すれば、逆に出ていかなくなる効果もあるんですよ。また弘前は、弘前大学を含む六大学を有する学都ですが、学生の地元就職が進んでいないことが大きな課題であると認識しています。そこで、例えば弘前大学が取り組んでいる学生と地元企業をマッチングさせる取り組み――『COC＋』――に市としても連携し、地元就職につなげていくように努めています」

葛西氏のいずれのお話も、市民の意識改革につながっているのが非常に興味深い。

時間をかけても魅力があれば旅人は来る

主要産業である観光においても、市民の姿勢は変わりつつある。その転機になったのは、二〇一〇年十二月四日の東北新幹線新青森駅開業だと振り返るのは、弘前市観光振興部長の櫻田宏氏だ。

新青森駅の開業により、東京とは約三時間でつながった。とはいえ弘前市は新幹線のルートから外れており、新青森駅からは在来線でさらに三〇分程度要する。

「新幹線開業に向け一丸となった取り組みをと言っても、当初は関係ないのになぜ？　という人が多かったんです。でも、私たちが東京に出かける場合、平気で三〇分、一時間と移動しますよね。魅力さえあれば、お客様は流れる。弘前がそこを目指すために市民の意識をどう向けるか、相当のエネルギーを使いました」

その礎として二〇〇八年に設立されたのが、弘前感交劇場推進委員会だ。弘前市新幹線活用協議会、弘前観光コンベンション協会、弘前商工会議所と、従来は個別に行われていた話し合いをひとつにまとめた機能的な体制がつくられた。「劇場」という言葉には、まち全体を舞台に見立て、世界遺産白神山地の恵みで成り立つ津軽地方の魅力を演目としてとらえて整理・編集した上で、新たな旅の提案をする目標がこめられている。

その弘前感交劇場推進委員会を中心に、商店街から宿泊施設の関係者、市民活動団体まで広く巻き込んで行われた実務者会議、通称「やわらかネット」が生まれた。会議といっても特別なテーマや出欠確認は無く、大学教員、僧侶、一般のサラリーマンや主婦と誰もが出入りでき、アメーバのように自在に分割、融合しながら進められるという。

「自分が思っていることを自由に発言し、それを形にしていく場を設けました。目指したのは、地

弘前観光コンベンション協会事務局長を務める坂本崇氏。検定テキストの影響か、一般の人たちがまちに関するうんちくを語る場面に遭遇する機会が増えたと喜ぶ。

弘前市民の台所「弘前中央食品市場」を案内する路地裏探偵団団長の鹿田智嵩氏。現在団員は約30名。地元のテレビ番組にも登場するなど人気を集めている。

域住民総仕掛け人。自信と誇りを持てる魅力ある地域づくりのため、今あるものの魅力に気づき、宝物としてどう生かしていくかを毎週、話し合ったんです」

やがてリンゴの花見や岩木山八合目から日本海の夕日を眺めるツアーなど、新たな観光素材が数多く見いだされていく。

いよいよ迫った新幹線新青森駅開業の機運を高めるため、弘前市では独自に六カ月前から毎月、駅でイベントを開催。積み重ねが実り、開業当日には新青森駅からの接続列車で来る観光客を出迎えるため、数百人もの市民が集まったそうだ。

まちが熟成していくなかで櫻田氏が目指すのは県内、あるいは隣接する秋田県や岩手県との広域連携だ。さらには、二〇一六年に開通した北海道新幹線により結ばれた津軽海峡の先、函館を要とする道南地域も視野に。行政サイドや商工会議所をはじめ、海峡を渡って弘前の魅力を伝える努力が重ねられた結果、協力体制が少しずつ構築され、道南から弘前へとインバウンドを含めた人の流れも確実に生まれているという。

市民それぞれが気づき始めたまちの宝物

そんな行政サイドと二人三脚で試みを重ねてきた弘前観光コンベンション協会事務局長の坂本崇氏は、かつての弘前観光の様子をこう語る。

「春のさくらまつり、夏のねぷたまつり、秋の菊人形まつり、冬の雪燈籠（ゆきどうろう）まつり。弘前の観光は、四季のお祭りだけでよかった時代があったんです。私が協会で仕事を始めた平成初頭は、それが陰りを見せ始めた頃。このままではいけないと、危機感を抱いていました」

弘前のメインストリート土手町がシャッター街へ変わりつつあるなか転機となったのは、二〇〇八年に始まった「津軽ひろさき検定」だ。

「一番の目標は、きちんと自分たちのまちを語れて、観光客におもてなしできる人を育てること。そのため、テキストには単なる正史だけではなく、昔から伝わっている話を『おべさまMEMO』としてできるだけ掲載しました」

「おべさま」とは、津軽弁で物知り博士を意味する。初回の受験者は一二〇〇人だったが、テキストは初版二〇〇〇部が一週間で売り切れ、五刷まで版を重ねる。一時期は地元の書店であのハリー・ポッターシリーズをしのぐほど売れたというから、その勢いのすごさが察せられる。

「地元の人でも『へえ』と思える話が受けて、テキストを買う人が増えた。そうこうしているうちに、自分たちのまちをもっと詳しく知りたいという欲求が、年齢を問わずに出てきたんです。タクシー会社もその流れに賛同し、きちんとまちの魅力をお客さんに伝えられるよう、駅で待つタクシーの運転手さんは検定の初級合格が必須、というルールも生まれました」

日常を見せるとのコンセプトのもとに生まれた、路地裏を案内す

上／メインストリート土手町に面するビル内の屋台村「かだれ横丁」は、路地裏探偵団を含め世代を超えてまちづくりに関心をもつ人が集まる場に。左／歓楽街の一角ほか、まちのありのままの景色や日常を見せることが観光になると坂本氏は話す。

るまちあるき「弘前路地裏探偵団」も、新たな潮流をつくった。とある旅行者の一言により、坂本氏はその企画発案を思い立ったそうだ。

「弘前の入り組んだ道を歩いていると、突然目の前に古い洋館や和菓子屋さんがあらわれる。道に迷うほど楽しいと。地形が起伏に富み道が狭く、一方通行が多い。私をはじめ市民はそこにコンプレックスを抱いていたんです。でも、それがまちの個性だと気づかされました」

江戸、明治、大正時代の建物に加え、日本におけるモダン建築のパイオニア前川國男氏の作品が、実作第一号「木村産業研究所（現・弘前こぎん研究所）」や市役所ほか八棟も残るなど、坂本氏曰く、町じゅうが建築物ミュージアムといっても過言ではない。

街角に奥ゆかしく潜む歴史的建造物に加え、地元民が利用する市場や歓楽街の路地裏をまわる「弘前路地裏探偵団」は、有料にもかかわらず現在、年間八〇〇～九〇〇人の集客がある。さらにはハンチング帽にサングラスという、ガイドのユニフォームでも注目を浴びている。

青森銀行記念館（重要文化財）をはじめとする洋館やカトリック弘前教会ほか明治期に建てられた教会など、ハイカラな建物がまちのそこかしこに残る。

上から前川國男氏の作品である弘前市庁舎、弘前市立博物館、弘前市民会館。

「まちづくりは自分たちも楽しまなければいけない、アイデアは無限大だよと。格好よく言えばおやじたちが率先して楽しんでいることを、まちの若者に背中で見せたかった」

そう笑う坂本氏の思惑どおり、後に学生たちもガイド役として参加。市場をはじめまちの人たちも、もてなしにひと役買うようになった。新たな有料ツアーも構築され、全体では年間二〇〇〇人以上が参加。その流れは県内二〇以上の市町村に広がり、連携した取り組みも行われるようになった。

地元の日常を観光資源に変えていく

よりターゲットを絞ってツアーを募る、「たびすけ」も面白い存在だ。創業は平成二十四年。代表の西谷雷佐（にしやらいすけ）氏は、リンゴの剪定体験や雪かき検定など、独自のツアーを編み出し、確実にファンを増やしている。

「どの枝を切ってどの枝を残すか。リンゴは味の七割が剪定で決まる。心配な木は冬の間も『あの木、どうしてらべ』と、子供のように思うそうです。そんな話を冬のリンゴ畑で農家さんから直接聞き、小枝を切るのはとても楽しい学びになるという発想です」

とはいえ当初、相談をもちかけた農家は「枝を切って何が面白いんだ」という反応。雪国の冬の労を逆手にとった、雪かき検定も同様だった。

「リンゴの生態を知らない人や雪の降らないまちの人にしてみれば、お金を払ってでも体験したいコンテンツなんですが、これまでは当たり前過ぎて想像できなかっ

まちづくりに関わる先輩たちが、自分の活動を下支えしてくれたという「たびすけ」代表の西谷雷佐氏。「バトンを次の世代に渡すという義務、責任がある。地域に恩返しをしていかなければと思います」と話す。

弘前市のまちなかから車を走らせればほどなく、道の両脇にリンゴ畑が広がり、春の終わりには白い花、秋には赤や黄色に染まったリンゴの実が景色を彩る。写真は６月上旬、枝にリンゴが実りはじめた頃。

たんだと思います」

日々の暮らしの中に価値があるというのが、西谷氏のコンセプト。うまいラーメン店や地元民が集うスナック巡り、果ては海岸で石を拾うだけというツアーにも、全国から客が集まる。全員の好みを理解し、やりとりをしつつ進めたいとの思いから、一回当たりの催行人数は多くても一〇人強。案内はSNSを中心とした、口コミで拡散されるという。

「好きな人にはたまらないテーマを、興味のある人が集まるコミュニティーに情報発信するのが、たびすけのスタイル。桜、ねぷた、アップルパイ、コーヒー、温泉、地酒など、多数ある弘前の魅力を幕の内弁当のようにそろえるのではなく、オーダーメード感覚で編めればビジネスになるんです」

西谷氏は弘前大学で観光に関する授業を受け持ち、次世代へとメッセージを伝える役割も果たしている。

「一昔前は、観光関係への就職といえば旅行会社やホテル、観光施設でした。でも今は違います。農家さんもお菓子屋さんも八百屋さんもシェフも、まちを歩く主婦だってガイドをすれば観光人材。観光は何にでもまたがる総合産業で、身近にあるんだと、学生たちには話しています」

短命県日本一の状況が健康への意識を変える

自分たちの日常に気づき、意識を変えていく試みは、健康面でもなされている。弘前大学大学院医学研究科　社会医学講座特任教授の中路重之（なかじしげゆき）氏が中心となり、二〇〇五年から続けられている「岩木健康増進プロジェクト健診」だ。

二〇一七年は一〇日間で約一二〇〇人が受検。大項目で約五〇、細分化すれば二〇〇〇もの項目からなるビッグデータが年々集計されている。

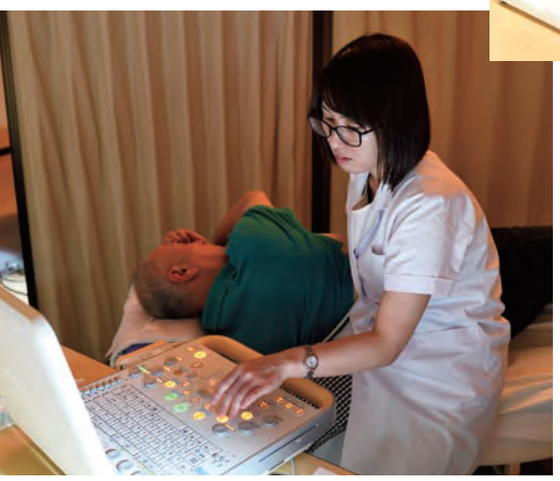
「人間の体はそれぞれが関連して動いていますが、加齢によってどの機能がどう落ちるのか、そこに各機能がどう関係しているのかが今まではわからなかった。ここでは口中や腸内の細菌から心臓をはじめ体全体の働き、体力測定まであらゆる機能を見ています。研究者にとって、わくわくするようなフィールドなんです」と中路氏は語る。

弘前市のみならず青森県全体として、現在、日本一の短命県という不名誉の返上が最大の課題。日銀主催の大学生の小論文・プレゼンテーションコンテスト、「日銀グランプリ」でも、弘前大学チームによる金融を活用した健康増進プロジェクトの提案が二年連続で脚光を浴びたほど、地元の人々の短命県返上への関心も高い。

中路氏によれば、短命県の原因は、飲酒、喫煙、運動不足、肥満、塩分の摂り過ぎなど青森県の生活習慣すべて。なかでも健診が行わ

「健診の項目数では、世界一のプロジェクト」と話す、弘前大学大学院医学研究科　社会医学講座特任教授の中路重之氏。受診者の平均年齢は50代半ば。若い世代も増えている。

ひとりにつき50近い健診が行われるが、機械的な流れ作業ではなく、担当者からそれぞれに丁寧な説明がなされ、受診者の話にもきちんと耳を傾ける様子が見られた。



れている旧岩木町（二〇〇六年に弘前市と合併）は、特に数字が芳しくないエリアだった。健診中には途中経過が伝えられ、結果に応じて指導が行われる。

「生活習慣だけでなく病院に行くタイミングも遅い。ですから、いろいろな問題を治しながら、健康への啓発に力を注ぐ必要があります。一人一人が賢くなるのが、健康づくりの基本。ここにきて皆さんが、健康に気をつけるようになりました」

薬品や飲食品など大手メーカーもこの取り組みに注目し、スタッフとして参加、協力する企業も増えている。

「短命県から脱出できたら、世界の注目が青森に集まります。すなわち、経済効果も生まれる。健康づくりはすなわち、まちづくりの一環。一人一人が存在感を持ち、つながりを感じて生きるということにも関わってくるんです」

そう語る中路氏は、もともと長崎県の出身だ。

「弘前に来て四五年が過ぎましたから、もう自分のまちなんです。だから、短命だと言われれば腹も立つ。お城、桜、ねぷた、民謡、岩木山、リンゴ……弘前みたいなすごい宝物を持ったまちは、ほかにないですよ。人は情が厚くて、誰かを押しのけて何とかするということはありません」

受け継がれていく愛すべき津軽の気質

中路氏の話を聞きながら思い出したのは、市長の葛西氏が語った弘前の人の気質だ。藩政時代から受け継がれてきた歴史や文化を守る「じょっぱり」（強情っ張り）、洋館や前川建築のようなハイカラをいち早く取り入れる「えふりこき」（いいカッコしい）、祭りをはじめ事が動けば盛り上がる「もつけ」（お調子者）。

「その代表格が私です」と冗談めかして笑う葛西氏を先頭に、まちづくり、すなわち人を育む流れが新たなステージへと進んでいる。象徴的なのは、市民の発案から生まれたダンスのまちとして話題になり、四万人を集客する大きなイベントがメインストリートで行われた。

「やわらかネット」は二〇一四年から通称「やわラボ」となり、弘前大学内のフリースペースを利用しはじめたところ、なにやら面白そうだとのうわさを聞きつけた大学生たちも参加。社会人とのつきあいのなかで学ぶことは多い上、自分たちの発案が実る喜びを体感できる場になっている。

二〇一六年には、市民一人一人がクリエーターになりまちづくりに参画するプロジェクト「弘前デザインウィーク」がスタート。国内はもちろん世界に向けて、津軽塗に代表される伝統工芸品など、積極的に文化が発信される。

かつて学生時代を弘前で過ごした太宰治は、まちへの愛を上手く語れないもどかしさを「津軽」で綴っていた。城をはじめ旅行案内書が示すことだけを、その魅力とするには不服だとも。弘前の人が多彩な宝物に気づきはじめた今、じょっぱり、えふりこき、もつけの典型である太宰がこのまちを歩いたら、照れながらも喜びをかみしめるのではないだろうか。

高さ約５メートルのねぷたの存在感に圧倒される「津軽藩ねぷた村」の展示。太鼓をたたく体験ができるほか、金魚ねぷたや津軽の工芸品などの製作実演を見学できる。津軽三味線の生演奏も行われている。